

『漢書』における『尚書』の継承

渡邊 義 浩

はじめに

『漢書』を著した班固は、後漢「儒教國家」の經義を定めた『白虎通』をまとめた、章帝期を代表する古文家の儒者であり、⁽¹⁾『文選』の筆頭に「兩都賦」を収録される賦家でもある。「兩都賦」は、「西都賦」で長安の華やかさを謳い、「東都賦」で洛陽の儒教に基づく姿を長安に勝るものとして描く。さらに、「東都賦」では、光武帝・明帝による「古典中國」⁽²⁾の形成過程が、『尚書』や『毛詩』を典拠に正統化され、揚雄のときに儒教と結合した賦が一層緊密に儒教經典と結びつけられている。

このように「兩都賦」は、『詩經』の「雅・頌」を規範とする漢の「雅・頌」を制作する試みであった。⁽⁴⁾それでは、同じく班固が著した『漢書』は、『尚書』を規範とする漢の「典・謨」を制作する試みと位置付けられるであろうか。⁽⁵⁾『漢書』が『史記』より紀傳體

を受け継ぐだけではなく、『尚書』を規範としていることは、つとに唐の劉知幾が指摘している。⁽⁶⁾しかし、近年では、『尚書』と『春秋』の折衷と把握する研究も多い。⁽⁷⁾

本稿は、班固が『尚書』を継承しなから、漢の「典・謨」を述べるために『漢書』を著したことを実証すると共に、なぜ班固が『漢書』を『尚書』に準えたのか、その理由を明らかにするものである。

一、班彪『後傳』の『史記』批判

『漢書』の述作は、父の班彪が司馬遷の『史記』を継いで著した『後傳』⁽⁸⁾に始まる。⁽⁹⁾班彪の叔父班固が、劉向と共に秘府の校書にあたり、朝廷から『史記』など秘府の副本を下賜されていたことは、それを可能にする条件の一つであった。⁽¹⁰⁾ただし、『漢書』が材料の多くを『後傳』に依拠するとしても、班彪と班固の史書編纂への意識は異なる。

班彪の『後傳』編纂の意図は、『後漢書』班彪傳に次のように述べられている。

武帝の時、司馬遷は史記を著すも、太初より以後は、闕きて錄せず。後に好事の者頗る時事を綴集する或り。然れども鄙俗多く、以て其の書を踵繼するに足らず。彪乃ち繼ぎて前史の遺事を探り、傍く異聞を貫きて、後傳數十篇を作り、因りて前史を斟酌して得失を譏正す。⁽¹²⁾

「好事の者」について、李賢注は、「楊雄・劉歆・陽城衡・褚少孫・史孝山の徒を謂ふ」とする。かれらの『史記』続成の試みを「鄙俗」と断じた班彪は、「後傳數十篇」を編纂したが、それは、単なる続編ではなく、『史記』の短所を改めることを目的としていた。『後漢書』班彪傳には、『後傳』の序論と考えられる「略論」が記載される。三つに分けて、班彪の『史記』への認識とその根底にある歴史観を検討しよう。

其の略論に曰ふ。唐・虞・三代は、詩・書の及ぶ所にして、世々史官有りて、以て典籍を司る。諸侯に暨びては、國ごとに自ら史有り。故に孟子に曰く、「楚の檮杌、晉の乗、魯の春秋、其の事一なり」と。定・哀の間に、魯の君子の左丘明は、其の文を論集し、左氏傳三十篇を作り、又異同を撰し、號して國

語と曰ひ、二十一篇あり。是れに由りて乗・檮杌の事は遂に聞くして、而して左氏・國語のみ獨り章はれり。又黃帝より以來、春秋に至るの時の帝王・公侯・卿大夫を記錄するもの有り、號して世本と曰ひ、一十五篇なり。春秋の後、七國並び争ひ、秦の諸侯を并はせば、則ち戰國策三十三篇有り。漢興りて天下を定むるや、太中大夫の陸賈は、時功を記錄し、楚漢春秋九篇を作る。孝武の世、太史令の司馬遷は、左氏・國語を探り、世本・戰國策を刪り、楚・漢列國の時事に據りて、上は黃帝より、下は獲麟に訖はるまで、本紀・世家・列傳・書・表を作るに凡そ百三十篇、而るに十篇缺けり。⁽¹³⁾

『後傳』略論は、史の起源から論を始める。唐堯・虞舜、そして夏・殷・周の三代は、『詩經』・『尚書』に記録が残り、代々史官が典籍を司っていた。李賢注は、『呂氏春秋』を典拠に、史官とは夏の太史の終古・殷の太史の向摯・周の太史の儋である、と具体的に指摘する。略論はそののち、話題を諸侯の記録に転じ、『孟子』が同様の史書とする楚の『檮杌』、晉の『乗』、魯の『春秋』が各国で編纂されたことを述べる。そして、左丘明により著された『左氏傳』・『國語』、黃帝から春秋に至るまでの記録である『世本』、さらには『戰國策』・『楚漢春秋』を取捨選択しながら、司馬遷が『史記』を編纂したことが語られる。これが班彪の『史記』の原資料理解である。したがって、司馬遷の『史記』は、黃帝から記述を始

めているが、その際に依拠したものは『世本』となり、『詩經』と『尚書』という儒教經典は使用していないことになる。

このため班彪は、漢初から武帝までの記録を残したことを司馬遷の功績と評価しながらも、儒教との関わりにおいて、次のように『史記』を批判する。

遷の記す所、漢の元めより武に至りて以て絶つは、則ち其の功なり。經を採り傳を摭るに至りては、百家の事を分散し、^⑩甚だ疎略多く、其の本に如かず。務めて多聞廣載を以て功と爲さんと欲するも、論議淺くして篇からず。^⑪其れ術學を論ずれば、則ち黃老を崇びて五經を薄んじ、貨殖を序すれば、則ち仁義を輕んじて貧窮を羞ぢ、游侠を道はば、則ち守節を賤しみて俗功を貴ぶ。此れ其の大敵にして道を傷ひ、極刑の咎に遇ふ所以なり。然れども善く事理を述序し、辯にして華ならず、質にして野ならず、文質相稱ふるは、蓋し良史の才なり。誠に遷をして五經の法言に依り、聖人の是非に同じくすれば、意ふに亦た庶幾からんや。^⑭

班彪は、『史記』が、第一に、多くの見聞や記録を載せるよう努めたものの、史実の選択を厳正にしていないこと、第二に、黃老思想を尊び五經を輕んずるなど、儒教を価値基準の中心に置かないことを批判する。ただし、第一と第二は、輕重が異なる。第二の欠点

が、司馬遷を「極刑の咎」に追い込んだ理由であり、「五經の法言に依り、聖人の是非に同じくすれば」、その史書は完全なものに近づき得た、と述べている。

さらに、班彪は『史記』の改めるべき点として、次の二点を掲げる。

夫れ百家の書すら、猶ほ法る可きなり。左氏・國語・世本・戰國策・楚漢春秋・太史公書の若きは、今の古を知る所以、後の由りて前を觀る所にして、聖人の耳目なり。司馬遷は帝王を序すれば則ち本紀と曰ひ、公侯の國を傳ふれば則ち世家と曰ひ、卿士の特起せば則ち列傳と曰ふ。^⑫又項羽・陳涉を進めて淮南・衡山を黜くるは、細意に委曲なるも、條列に經ならず。遷の著作の若きは、古今を採獲し、經傳を貫穿し、至りて廣博なり。一人の精なれば、文は重なり思は煩はしく、^⑬故に其の書刊落しても盡きず、尙ほ盈辭有り、多く齊一ならず。司馬相如を序するが若きは、郡縣を擧げ、其の字を著すも、蕭・曹・陳平の屬、及び董仲舒の並時の人に至りては、其の字を記さず、或ひは縣いひて郡いはざる者は、蓋し暇あらざるなり。今此の後篇、慎みて其の事を覈かにし、其の文を整齊し、世家を爲らず、唯だ紀・傳あるのみ。傳に曰く、「史を殺ぎて極を見し、平易正直なるは、春秋の義なり」と。^⑮

班彪は、第三に、項羽を本紀に陳勝を世家に立てるなど、司馬遷

自らが立てた紀傳體の体裁を破っていること、第四に、名だけで字がなく縣だけで郡が記されないなど、人名・地名の表記に統一性が無いことを批判する。そして、自らの「後篇」は、それらを正したものであるとし、「史を殺ぎて極を見し、平易正直なるは、春秋の義なり」という「傳」を引用して終わる。すなわち、『史記』が儒教に依拠しないことや不体裁を批判しながらも、班彪は、『史記』と同様、「春秋の義」を明らかにするために『後傳』を著しているのである。班彪の歴史観は、本来諸侯の「史」である『春秋』に依拠して「春秋の義」を説くことを第一義に置く。班固の『史記』認識・歴史観との最大の相違はここにある。

班彪の『後傳』を継承した班固の『漢書』は、班彪が掲げた『史記』の四つの欠点を克服している。『漢書』は、資料・作品を原文に近い形で掲げ、人名・地名の表記に統一性を持つ。第一・第四の改善である。また、第三を改善して、紀傳體の体裁を整えている。⁽¹⁷⁾

そして、何よりも儒教を価値基準の中心に置く。第二の改善である。『漢書』には、前漢武帝の時、董仲舒の献策により、太學に五經博士が置かれ、諸子を退け、儒教を一尊することが定められた、との事実と異なる記載がある。⁽¹⁸⁾そこには、劉向・劉歆に大きな影響を与えた董仲舒を顕彰するとともに、前漢が儒教を國教としていたと描こうとする意図が見える。また、律曆志には、劉歆の三統曆の精緻な構造を記録し、五行志には、董仲舒・劉向・劉歆の災異解釈を掲げ、古今人表では、董仲舒學派の性三品説に基づき人物を九等

に分類する。⁽¹⁹⁾このように、儒教を価値基準の中心に置き、董仲舒を自らの学統の祖として尊重することは、『漢書』の大きな特徴である。

それは、漢堯後説に基づき、漢の正統性を説くことに通底する。⁽²⁰⁾漢堯後説は、『春秋左氏傳』を論拠に、漢の祖先を堯の末裔とする説で、劉歆が漢火德説とともに主張した。漢火德説は、相生の五德終始説に基づき、同じく『春秋左氏傳』により、古帝王の系譜に少昊を入れることで実証される。漢堯後説による漢の正統化は、すでに班彪の「王命論」に見られるが、『漢書』は高帝紀の贊で、漢堯後説の標榜、漢火德説の支持、『春秋左氏傳』の偏重、讖緯思想の受容を表現している。⁽²¹⁾これも『漢書』の大きな特徴である。

このように『漢書』は、班彪が『後傳』略論で展開した『史記』への批判を踏まえて記されており、班彪の歴史観の影響を受けている。しかし、『春秋』を受け継ぐ『史記』を継承して、『後傳』を著した班彪とは異なり、班固は、書名に象徴されるように、『尚書』を継承して『漢書』を著した。⁽²²⁾それは、班固のいかなる歴史観に基づくのであろうか。

二、諸侯の『春秋』と王者の「典・謨」

班固は、『漢書』を著した背景となる自らの歴史観について、『漢書』敘傳で次のように述べている。

(班)固 以爲へらく、唐・虞・三代は、詩・書の及ぶ所、世々典籍有り、故に堯・舜の盛んになると雖も、必ず典・謨の篇有りて、然る後に名を後世に揚げ、徳を百王に冠とせり。故に曰く、「巍巍乎として其れ成功有り、煥乎として其れ文章有り」と。漢は堯の運を紹^つぎて、以て帝業を建つるも、六世に至りて、史臣乃ち功徳を追述し、私に本紀を作り、百王の末に編み、秦・項の列に廁^{まじ}へ、太初より以後は、闕きて録せず。故に前記を採纂し、聞く所を綴輯して、以て漢書を述ぶ。高祖より起こし、孝平・王莽の誅に終はるまで、十有二世、二百三十五年。其の行事を綜べ、旁^{よま}く五經を貫き、上下 洽通して、春秋考紀・表・志・傳を爲ること凡そ百篇⁽²³⁾。

班固の「敘傳」の冒頭は、班彪の「略論」を継承する。しかし、班彪の「略論」が、「唐・虞・三代は、詩・書の及ぶ所にして、世々史官有りて、以て典籍を司る。諸侯に暨びて、國ごとに自ら史有り」と、諸侯の「史」から「春秋」へと論を展開することに対して、班固は、諸侯の「史」を問題としない。漢は、「帝業を建」てたものであり、諸侯ではないからである。したがって、漢の史の規範とすべきは、「堯・舜」の「名を後世に揚」げた「典・謨の篇」である。「典・謨」は、古文『尚書』では、堯典篇・舜典篇、大禹謨篇・皋陶謨篇・益稷篇のことである。ちなみに、今文では堯典篇・皋陶謨篇であるが、班固は古文家である。班固は、『漢書』の

規範を『尚書』の「典・謨」に求める歴史観を持つ。

続けて引用する「巍巍乎として其れ成功有り、煥乎として其れ文章有り」は、『論語』泰伯第八の、堯の「成功」は『尚書』堯典という輝かしい「文章」を俟って伝えられた、と孔子が文の重要性を説く章である。漢は、「堯の運を紹^つぎて、以て帝業を建て」たにも拘らず、武帝のときの「史臣」司馬遷が「私」的に「本紀を作り」、漢を百王の後に置き、秦や項羽と同列視した。班固はこのため『漢書』を「述」べた、というのである。「述」はもちろん、『論語』述而第七の「述べて作らず(述而不作)」を踏まえる。孔子が、堯の「成功」を「述」べたものは、『春秋』ではない。『漢書』藝文志は、『尚書』の編者について、次のように記している。

易に曰く、「河は圖を出し、雒は書を出し、聖人 之に則る」と。故に書の起こる所は遠し。孔子 焉を纂するに至り、上は堯に斷ち、下は秦に訖はる、凡そ百篇。而して之が序を爲り、其の作意を言ふ⁽²⁵⁾。

班固は、孔子が『尚書』を「纂」するにあたり、「上は堯に斷ち、下は秦に訖はる、凡そ百篇」であった、と藝文志に明記する⁽²⁶⁾。堯の「成功」は、孔子が『尚書』に「述」べたのである。班固が、「前記を採纂し」、「高祖より起こし、孝平・王莽の誅に終はるまで」を『尚書』と同じ巻数である百卷の『漢書』に「述」べたのは、この

ためである。漢堯後説によれば、高祖は、堯の末裔なのである。班固は、『史記』はもとより、父班彪の『後傳』が『春秋』を書き継ごうとしたことを「諸侯」の「史」に過ぎないとみなし、『尚書』を継承して『漢書』を述べた。それは孔子の業に匹敵する営為であった。また、班固は、堯の典（常法）を漢が受け継ぎ、それを引き伸ばしたことを称える賦である「典引」においても、堯の徳を称え、堯の後裔である漢のために、孔子が法を準備したことを次のように表現している。

夫れ上は乾則を稽へ、降りて龍翼を承け、而して諸を典・謨に炳かにして、以て冠徳卓絶する者の若きは、^①陶唐より崇きは莫し。陶唐は胤を捨てて、有虞に禪り、有虞も亦た夏后に命じ、稷・契は載を熙め、越に湯・武を成す。股肱は既に周く、天は迺ち功を^②元首に歸し、^③將に漢劉に授けんとす。⁽²⁷⁾

班固は、①「陶唐（堯）」の「乾則（天の法則）」と「龍翼（稷・契ら優れた輔佐の臣）」が、『尚書』の「典・謨」には明記されている、という。孔子は、それを漢劉に授けようとした、というのである。そして、孔子から受け継いだ漢の盛徳は、帝王の儀法とすべきであると続ける。

蓋し以へらく^④當天の正統に膺り、^⑤克讓の歸運を受け、^⑥炎上

の烈精を蓄へ、^⑦孔佐の弘陳を蘊むと爾云ふ。洋洋乎たり若き徳、帝者の上儀なり。誥・誓も及ばざる所のみ。⁽²⁸⁾

①「克讓」（『尚書』堯典篇により堯のこと）の歸運を継ぎ、②「炎上」（『尚書』洪範篇により火徳のこと）のよき精を蓄えた漢は、③孔子の教えを受け継いで、④「當天の正統」となり、その徳は、「誥・誓」も及ばないほどである、という。「誥」は『尚書』仲虺之誥篇・湯誥篇・大誥篇・康誥篇・酒誥篇・召誥篇・洛誥篇・康王之誥篇、「誓」は『尚書』甘誓篇・湯誓篇・泰誓篇・牧誓篇・費誓篇・秦誓篇を指す。こうした『尚書』の諸篇に記された帝王の言葉よりも、聖漢の方がまことに帝王の優れた道である、と班固は述べているのである。

班固の『漢書』は、『尚書』の「典・謨」を継承するものである。たとえ『尚書』であっても「誥・誓」などでは及ばない、後の帝王の儀法とすべき、漢の「帝者の上儀」を伝える漢の「尚書」が『漢書』であった。『漢書』各卷の末尾に記される班固の言葉が、『春秋』の「君子曰」や、その流れを汲む『史記』の「太史公曰」という批評ではなく、「贊」として表現されることは、『漢書』の規範性を端的に物語る。

これに対して、そうした規範性を持たない司馬遷の『史記』への班固の評価は、『漢書』司馬遷傳の贊に次のように記されている。

贊に曰く、「古に書契の作られしよりして史官有り、其の載籍は博し。孔氏之を纂するに至り、上は唐堯を繼ぎ、下は秦繆に訖はる。唐虞より以前は、遺文有ると雖も、其の語不經なり。故に黃帝・顓頊の事を言ふも、未だ明らかにす可からざるなり。／孔子魯の史記に因りて春秋を作るに及びて、而して左丘明其の本事を編輯して以て之が傳を爲り、又異同を纂して國語を爲る。又世本有り、黃帝より以來、春秋に至るの時の帝王・公侯・卿大夫の祖世の出づる所を録す。春秋の後、七國並び争ひ、秦諸侯を兼ぬれば、戰國策有り。漢興りて秦を伐ち天下を定むるや、楚漢春秋有り。故に司馬遷左氏・國語に據り、世本・戰國策を采り、楚漢春秋を述べ、其の後事に接ぎて、天漢に訖はる。其の言秦漢に詳し。經を采り傳を撰るに至りては、數家の事を分散し、^①甚だ疏略多く、或ひは抵牾有り。亦た其の涉獵する者廣博にして、經傳を貫穿し、古今を馳騁し、上下數千載の間、斯れ以て勤めたり。又其の是非頗る聖人に繆り、^②大道を論ずれば則ち黃老を先にして六經を後にし、遊俠を序すれば則ち處士を退けて姦雄を進め、貨殖を述ぶれば則ち勢利を崇びて賤貧を羞む、此れ其の蔽なる所なり。然れども劉向・揚雄博く羣書を極めてより、皆遷が良史の材有るを稱し、其の善く事理を序するに服し、辨にして華ならず、質にして俚ならず、其の文や直、其の事や核にして、虛美あらず、善を隱さず、／故に之を實錄と謂ふ。嗚呼、

遷の博物洽聞を以てして、而も以て自全を知る能はず、既に極刑に陥ち、幽せられて發憤す。書も亦た信なるかな。其の以て自ら傷悼する所を迹ぬるに、小雅の巷伯の倫なり。夫れ唯だ大雅のみ、既に明且つ哲、能く其の身を保つ。難きかな」と。^{②)}

二つのスラッシュ（／）で区切った内側は、基本的に班彪の『後傳』略論の司馬遷評價を継承している。ただし、班彪が四點挙げていた『史記』への批判は、傍線部に示した二点に絞られている。班彪の「略論」を踏襲しない一つ目のスラッシュの前では、『尚書』こそ、古の史官が残り、孔子がそれを「纂」した「史」であることが述べられる。「上は唐堯を繼ぎ、下は秦繆に訖はる」『尚書』の記述範囲こそが、經に基づく史の部分であり、それより以前は「不經」と位置付けられている。班固と班彪の歴史觀の相違が明確に分かる。

また、二つ目のスラッシュの後では、司馬遷の『史記』を「實錄」と評しているが、班彪の「略論」では、ここは司馬遷を「良史の才」と評する部分であった。すなわち、班固は、司馬遷を「良史」とは認めていないのである。

史とは本来、孔子が「纂」した『尚書』の原著者だけに限定されるべきもので、『春秋』を継承する司馬遷を班固が「良史」と承認することはなかった。それは、『漢書』藝文志に、『史記』が春秋家

に位置付けられていることにも明らかである。⁽³⁰⁾

このように、班固は司馬遷を「良史」とは見なさず、『尚書』に匹敵する漢の「史」を著すために『漢書』を「述」べた。班固は、自らこそ孔子にも準えるべき「史」であると認識した上で、『尚書』を継承して『漢書』を「述」べたのである。そうした『尚書』の継承を明確に示すものが、『漢書』王莽傳である。

三、王莽傳と『尚書』秦誓篇

班固の『漢書』において、王莽傳は特殊な地位を持つ。列傳であるにも拘らず、体裁は本紀なのである。本紀と同様、王莽傳は年代記として編纂され、王莽の詔・制・令・書のみならず、孺子嬰に対して漢の天命が尽きたことを述べる策命までもが掲載されている。⁽³¹⁾

先に掲げた『漢書』の敘傳に、「春秋考紀・表・志・傳を爲る」と凡そ百篇」とあるように、『漢書』には『春秋』の要素が全く含まれないわけではない。本紀を「春秋考紀」と称し、呂后を入れて帝紀を十二とすることも、『春秋』十二公に準えたと考えてよい。その際、同じく前掲の敘傳に、「高祖より起こし、孝平・王莽の誅に終はるまで、十有二世、二百三十年」と王莽を断限とすることを述べながらも、本紀の体裁を持つ王莽傳を列傳の最後に掲げるのはなぜか。ここには、『漢書』による『尚書』の構造の継承を見ることができる。結論的に言えば、王莽傳は、『尚書』の秦誓篇に当た

るのである。⁽³²⁾

『尚書』の末尾である秦誓篇は、晉の襄公に殺で敗れた（春秋左氏傳）僖公三十三年）、秦の穆公による悔恨の誓辞であり、他の誓とは形式と内容を異にしている。秦誓篇の結論は、「邦の机隄は、日に一人に由り、邦の榮懷も、亦た一人の慶に尙る（邦之机隄、日由一人、邦之榮懷、亦尙一人之慶）」という最後の一文にある。⁽³⁴⁾これを『漢書』王莽傳の贊は、踏まえている。王莽への贊は、王莽を賛美した者への批判から始まる。

贊に曰く、「王莽 始め外戚より起ち、節を折り行に力めて、以て名譽を要め、宗族は孝を稱し、師友は仁に歸す。其の位に居り政を輔くるに及びて、成・哀の際に、國家に勤勞し、道を直くして行み、動もすれば稱述せらる。豈に所謂る、家に在りても必ず聞へ、國に在りても必ず聞へ、色に仁を取りて行ひは違ふ者や。」⁽³⁵⁾

班固は、王莽が外戚として高位にあり、國家のために勤勞し、道を直くしたので、称えられることもあった、と王莽を評価する者があったことを認める。しかし、王莽を評価することは、『論語』顔淵篇にいう「聞」と「達」の違いを弁えぬ所業である。⁽³⁶⁾『論語』を援用することで班固は、揚雄のように王莽を褒め称えた輩は、王莽が「聞」であって「達」ではないことを見抜けなかった愚者であ

る、と断罪しているのである。

そして、班固は、王莽が皇帝位を盗むことができた理由を「時」に求める。

莽 既に不仁にして佞邪の材有るも、又 四父の歴世の權に乘り、漢の中ごろに微へ、國統 三たび絶ゆるに遭ひて、而るに太后は壽考にして之が宗主爲れば、故に其の姦慝を肆にして、以て篡盜の禍を成すを得たり。是を推して之を言ふに、亦た天の時にして、人力の致すに非ざるなり。⁽³⁷⁾

伯父の四人（王鳳・王音・王商・王根）が歴世相繼いで政權を掌握したこと、漢が中ごろの衰微に遭い、（成帝・哀帝・平帝に子がなく）國統が三たび絶えたこと、王太皇太后（元皇后）が長命であつたこと、これらが王莽が得た「天の時」である。

しかし、王莽の皇帝の地位は、根柢のないものである。そのため転覆への勢いは夏・殷を自滅させた桀王・紂王にもまして激しい。それでも王莽は、自ら黃帝・虞舜の再現であるとし、暴虐の限りを尽くし、中華のみならず夷狄にまでその争乱を及ぼした、と班固は続ける。

其の位を竊みて南面するに及ぶも、處は據る所に非ず、顛覆の勢は桀紂より險し。而るに莽 晏然として自ら以へらく、黃・

虞 復た出づるなりと。乃ち始めて恣睢にして、其の威詐を奮ひ、天に滔り民を虐げ、凶を窮め惡を極め、毒は諸夏に流れ、亂は蠻貉に延ぶるも、猶ほ未だ其の欲を逞しくするに足らず。是を以て四海の内、囂然として其の樂生の心を喪ひ、中外憤怨して、遠近 俱に發し、城池 守らず、支體 分裂して、遂に天下の城邑をして虚と爲さしめ、邱壠 發掘せられ、害は生民に徧く、辜は朽骨に及ぶ。⁽³⁸⁾

このため、内外は恨み憤り、遠近がともに立ち上がって王莽を打倒したのである。古からの文献に伝えられた「亂臣賊子」や「無道の人」のなかで、王莽ほど禍いと失敗をもたらしたものはいなかった。班固は、このように王莽の生涯を総括したのち、秦と王莽を比較する。ここから『漢書』と『尚書』との關係を考えることができる。

書傳の載する所より亂臣・賊子・無道の人、其の禍敗を考ふるに、未だ莽の如き甚しき者有らざるなり。昔 秦は詩書を燔きて以て私議を立て、莽は六藝を誦して以て姦言を文る。歸を同じくして塗を殊にし、俱に用て滅亡し、皆 炕龍の絶氣、非命の運なり。紫色・堦聲、餘分の閭位にして、聖王の驅除するのみと。⁽³⁹⁾

むかし、秦は詩書を焚いたが、王莽は六藝を誦しながら姦言を文

飾した。秦と王莽は、その道を異にしながらも結果として共に滅亡した。両者のような「亢龍の絶氣（無徳にして高位に居るもの）」は、「非命の運（天命を全うできない定め）」であり、「紫色（のような中間色）」や「蠅聲（かえるのような淫声）」や「閭位（五行相生に呼応しない国家）」は、「聖王（高祖劉邦と光武帝劉秀）」によって駆除されたのである。このように、班固は王莽を秦と並べて批判している。

その際、貫かれているものは、『尚書』秦誓篇の「邦の机隍は、曰に一人に由り、邦の榮懷も、亦た一人の慶に尙る」という論理である。すなわち、漢は、王莽という一人により滅ぼされ、光武帝という一人により復興した。しかも、漢という国家を建設したのも、高祖という一人の「聖王」による。このように『尚書』が、堯という一人が中華の基本を築きあげるところから、秦の穆公という一人が敗戦を悔やむことまでを描いているように、『漢書』は、高祖という一人が漢の基本を築きあげ、王莽という一人が漢を滅ぼすまでの史を述べることでできたのである。王莽傳は、『尚書』秦誓篇と同じく、悔恨の篇として前漢の『尚書』たる『漢書』の最後に置かれたものと言えよう。

このように、『漢書』は、『尚書』を継承して漢の「史」を述べた。それは、『史記』の八書と比較した際、創設された『漢書』の十志が、刑法志（『尚書』呂刑⁽⁴⁰⁾）・五行志（『尚書』洪範⁽⁴¹⁾）・地理志（『尚書』禹貢⁽⁴²⁾）、そして劉歆の「七略」を踏襲した藝文志であるこ

とからも窺えよう。さらに、『史記』を踏襲する食貨志も、冒頭は「洪範八政、一曰食、二曰貨」と『尚書』を引き、郊祀志の冒頭も「洪範八政、三曰祀」と、『尚書』により意義付けされている。班固が『尚書』を継承したことは明らかである。

班固は、父も司馬遷も尊重した『春秋』ではなく、帝王の「史」である『尚書』を尊重したが、その背景には、『春秋左氏傳』が王莽に利用されたことへの嫌悪がある。『史記』への反発の理由も、王莽が司馬遷の後裔を探して「史通子」に封建している（『漢書』卷六十二 司馬遷傳）ことに求めてもよい。あるいは逆に『尚書』の尊重理由に、光武帝が太學で『尚書』を専門に学んだことを挙げてもよいであろう。

『春秋左氏傳』は、春秋時代を賛美するために書かれたものではなく、春秋時代を題材として、「君子曰」などの評により、時代への毀誉褒貶を明らかにし、それを鑑に現世を警告するものであった。これに対して、『尚書』は、聖王の言葉を書き留めることにより、聖王の御世を賛美し、それを現世の規範とするものである。漢を聖王の御世と位置付けたい班固が、『尚書』を継承するのは当然のことであった。それでも班固が、『史記』の紀傳體を継承したのは、『春秋左氏傳』に精通した古文家としての歴史感覚にある。

たとえば、西晉の孔衍が著した『漢尚書』・『後漢尚書』・『魏尚書』は、漢魏の史書より「美詞典言・龜鏡爲るに足る者を取」つたもので（『史通』内篇卷一 六家篇）、『漢書』の『尚書』の継承を

より先鋭化したものと考えてよい。劉知幾は『史通』で、『逸周書』に続けてこれらを取りあげ、「王道の正義を宣べ、語言を臣下に發する」尙書家を代表させている。⁽⁴³⁾しかし、劉知幾が孔衍への批判で述べるように、天子に関して本紀がなく、公卿に対して列傳がなければ、年代の基準が失われる。班固が『尙書』を継承しながらも、『春秋』の流れを汲む司馬遷の『史記』の紀傳體を踏襲したのは、このためなのである。

おわりに

班固の『漢書』は、『尙書』を継承して漢の「典・謨」を「述」べたものである。班固の詩賦が、漢の「雅・頌」（『詩經』）として、文学を儒教に組み込むものであれば、班固の『漢書』は、漢の「典・謨」（『尙書』）として、史学を儒教に組み込むものである。その際、規範とした儒教經典は、諸侯の「史」である『春秋』ではなく、帝王の「史」である『尙書』であった。父班彪の著した『後傳』が、『史記』を批判しながらも、『春秋』を継承するその歴史觀を継承したことは異なり、班固は『史記』の続成からは断絶していた。そして、『尙書』を継承する「史」であることを示すために、堯から始まり秦の穆公の悔恨で終わる『尙書』に準えて、高祖から始まり王莽の悪政で終わるよう、『漢書』を構成した。ここに『漢書』は、史書の儒教化を達成したのである。

こうした執筆意図を持つ『漢書』は、今日的な意味での正確な史実を記す必要性を持たない。後漢を筆頭とする後世が、鑑戒とすべき「在るべき姿」として、前漢を描いていくことになる。班固が前漢をどのような儒教の理想国家、すなわち「古典中國」として描いたのかについては、稿を改めて論ずることにしたい。

《注》

- (1) 「白虎通」の後漢「儒教國家」における重要性については、渡邊義浩「後漢儒教の固有性」(『兩漢の儒教と政治権力』汲古書院、二〇〇五年、『後漢における「儒教國家」の成立』汲古書院、二〇〇九年に所収)を参照。なお、侯外廬「班固的庸俗思想及其人文思想」(『中国思想通史』人民出版社、一九五七年)は、班固が「白虎通」で表現した天道觀念は、『漢書』の史学思想とは結合していないとして、班固を二重人格の折衷主義者とする。一方、安作璋「班固『漢書』評述」(『破与立』一九七八—一九七八年)は「白虎通」と『漢書』が共に三綱五常で貫かれているとする。
- (2) 「古典中國」については、渡邊義浩「古典中國」の成立と展開」(『中国史の時代区分の現在』汲古書院、二〇一五年)を参照。
- (3) 揚雄のときに、賦が儒教と結合したことについては、渡邊義浩「揚雄の『劇秦美新』と賦の正統化」(『漢学会誌』五一、二〇一三年、『古典中國』における文学と儒教) 汲古書院、二〇一五年に所収)を参照。
- (4) 「兩都賦」を漢の「雅・頌」と捉えることは、渡邊義浩「班固の賦作と『雅・頌』」(『東洋研究』一九四、二〇一四年、『古典中國』における文学と儒教) 前掲に所収)を参照。このほか、『漢書』と文学との関係については、潘定武『漢書』文学論稿(安徽大学出版社、二〇〇八年)、孫亭玉『班固文学研究』(湖南人民出版社、二〇〇八年)、呉崇明『班固文学思想研究』(上海古籍出版社、二〇一〇年)などがある。

(5) 『漢書』卷八十七下 揚雄傳下に、「典・謨之篇、雅・頌之聲」とあるように、当該時代に、『尚書』「典・謨」と『詩經』「雅・頌」とは、対概念と認識されていた。

(6) 『史通』内篇卷一 六家篇 漢書家に、「昔 虞夏の典・商周の誥は、孔氏の撰する所、皆之を書と謂ふ。夫れ書を以て名と爲すは、亦た古の偉稱に稽ぶるなり（昔虞夏之典・商周之誥、孔氏所撰、皆謂之書。夫以書爲名、亦稽古之偉稱）」とあるように、劉知幾は、『漢書』の「書」を『尚書』の「書」とりわけ「典・誥」に由来する、と考える。また、劉咸忻『漢書知意』（『推十書』成都古籍書店、一九九六年）は、『漢書』の名が『尚書』の「虞夏書」に由来する、と指摘している。

(7) 柴田昇『漢書』初探—「漢書」の成立と発想に関する初步的研究—（『漢書』とその周辺 崑崙書房、二〇〇八年）は、『漢書』における王者の歴史は、『春秋』を継ぎ、『史記』で確立された本紀という形式を用いて、『史記』の内容に改変を加えつつ、『尚書』を継承する「漢」の書として構想されたものであり、『春秋』＝『史記』的发想と『尚書』的发想の複合体として理解できる、とする。また、内山直樹「班固の断限意識について—「春秋考紀」という呼称の背景—」（千葉大学人文研究）四〇、二〇一一年）は、班固が『漢書』の紀を「春秋考紀」と称した背景に、『漢書』の紀を『史記』本紀の超克の、直接『春秋』に準える必要性があったことを明らかにし、そこに『漢書』における『尚書』的发想と『春秋』的发想の結合を主張している。

(8) 班彪の『後傳』については、福井重雅「班彪『後傳』の研究—『漢書』編纂前史」（『陸賈』新語）の研究 汲古書院、二〇〇二年）を参照。

(9) 班彪以前に、『史記』を書き継いでいた楊惲や補続をした褚少孫などについては、余嘉錫「太史公書亡篇考」（『余嘉錫論学雜著』上冊、中華書局、一九六三年）、趙生群「史記亡欠与統補考」（『史記』文献学叢稿 江蘇古籍出版社、二〇〇〇年）、張大可「關於史記統補与亡篇散論二題」（『史記研究』華文出版社、二〇〇二年）、内山直樹「褚少孫の『史記』補

統」（『中国文化』六一、二〇〇三年）、中西大輔「前漢後期ノ新代における『史記』とその補続者について」（『国学院雜誌』一〇九・五、二〇〇八年）・「新末ノ後漢初期の『史記』とその補続者について」（『学習院史学』四七、二〇〇九年）、呂世浩「從『史記』到『漢書』—軋拆過程与歷史意義」（国立台湾大学出版中心、二〇〇九年）などを参照。

(10) 稲葉一郎「漢書」の成立」（『東洋史研究』四八・三、一九八九年、『中国史学史の研究』京都大学出版会、二〇〇六年に所収）。なお、班固の伝記には、安作璋「班固評伝—一代良史」（『広西教育出版社、一九九六年』、陳其泰・趙永春『班固評伝』（南京大学出版社、二〇〇二年）がある。

(11) 班固が『漢書』を叙述した際に、基づいた資料は、顧頡剛「班固窃父書」（『史学史研究』一九九三・二、一九九三年）、楊樹達「漢書」所据史料考」（『大公报・文学副刊』二二九、一九三二年）に詳しい。

(12) 武帝時、司馬遷著史記、自太初以後、闕而不錄。後好事者頗或綴集時事。然多鄙俗、不足以踵繼其書。彪乃繼探前史遺事、傍貫異聞、作後傳數十篇、因斟酌前史而譏正得失（『後漢書』列傳三十上 班彪傳）。

(13) 其略論曰。唐・虞・三代、詩・書所及、世有史官、以司典籍。暨於諸侯、國自有史。故孟子曰、楚之禱机、晉之乘、魯之春秋、其事一也。定・哀之間、魯君子左丘明、論集其文、作左氏傳三十篇、又撰異同、號曰國語、二十一篇。由是乘・禱机之事遂闕、而左氏・國語獨章。又有記錄黃帝以來、至春秋時帝王・公侯・卿大夫、號曰世本、一十五篇。春秋之後、七國並爭、秦并諸侯、則有戰國策三十三篇。漢興定天下、太中大夫陸賈、記錄時功、作楚漢春秋九篇。孝武之世、太史令司馬遷、採左氏・國語、刪世本・戰國策、據楚・漢列國時事、上自黃帝、下訖獲麟、作本紀・世家・列傳・書・表凡百三十篇、而十篇缺焉（『後漢書』列傳三十上 班彪傳）。

(14) 遷之所記、從漢元至武以絕、則其功也。至於採經摭傳、分散百家之事、甚多疎略、不如其本。務欲以多聞廣載爲功、論議淺而不篤。其論術學、則崇黃老而薄五經、序貨殖、則輕仁義而羞貧窮、道游俠、則賤守節而貴俗功。此其大敝傷道、所以遇極刑之咎也。然善述序事理、辯而不華、實而不野、

文質相稱、蓋良史之才也。誠令遷依五經之法言、同聖人之是非、意亦庶幾矣(『後漢書』列傳三十上 班彪傳)。なお、班彪と班固の司馬遷批判については、趙光賢「評班氏父子對司馬遷的批評」(『歷史知識』一九八〇・一五、一九八〇年)がある。

- (15) 夫百家之書、猶可法也。若左氏・國語・世本・戰國策・楚漢春秋・太史公書、今之所以知古、後之所由觀前、聖人之耳目也。司馬遷序帝王則曰日本紀、公侯傳國則曰世家、卿士特起則曰列傳。^③又進項羽・陳涉而黜淮南・衡山、細意委曲、條列不經。若遷之著作、採獲古今、貫穿經傳、至廣博也。一人之精、文重思煩。^④故其書刊落不盡、尚有盈辭、多不齊一。若序司馬相如、舉郡縣、著其字、至蕭・曹・陳平之屬、及董仲舒並時之人、不記其字、或縣而不郡者、蓋不暇也。今此後篇、慎覈其事、整齊其文、不爲世家、唯紀・傳而已。傳曰、殺史見極、平易正直、春秋之義也(『後漢書』列傳三十上 班彪傳)。

- (16) たとえば、『史記』滑稽 東方朔傳は、文字の異同が多い不完全な「答客難」を引用するのみであるが、『漢書』東方朔傳は、「答客難」と「非有先生論」を「文選」とほぼ字句の異同なく引用する。さらに、「答客難」・「非有先生論」の二篇が、東方朔の文辞の中で最も良く、劉向の「別錄」にも著録される真作であり、世に伝わる他の文は真作ではない、と校勘を加えている。

- (17) たとえば、『史記』では、本紀にあった項羽の記述を皇帝に即位していないので項籍列傳(羽は字なので名に統一)に移し、また、順不同に置かれていた夷狄傳を列傳の終わりに集めて、華夷の別を明らかにし、刺客・滑稽列傳を削除して、儒教に基づき紀傳體の体裁を整えている。

- (18) 福井重雅『漢代儒教の史的研究』(汲古書院、二〇〇五年)を参照。

- (19) 性三品説と董仲舒学派との関係、およびその漢代以降の展開と影響については、渡邊義浩「魏晉南北朝における「品」的秩序の展開」(『魏晉南北朝における貴族制の形成と三教・文学』汲古書院、二〇一一年)を参照。

- (20) 板野長八「班固の漢王朝神話」(『歴史学研究』四七九、一九八〇年、

『儒教成立史の研究』岩波書店、一九九五年)は、『漢書』を漢魏後説と漢火徳説に基づいて漢を神聖王朝として描いた史書であるとする。これに対して、小林春樹「漢書」帝紀の著述目的―「高帝紀」から「元帝紀」を中心として(『東洋研究』一七六、二〇一〇年)は、『漢書』では高祖以外の皇帝が聖王とされないことを指摘し、『漢書』の編纂意図は後漢を正統的・必然的王朝と捉えることにある、という。本稿は、高祖一人を聖王とする『漢書』の構成に、『尚書』秦誓篇の継承を見る。

- (21) 『漢書』と劉歆・劉向との関係については、福井重雅「班固の思想」上・下(『村山吉廣教授古希記念中国古典学論集』汲古書院、二〇〇〇年、『史滴』二一、一九九九年、『漢代儒教の史的研究』前掲に所収)を参照。また、汪春泓「論劉向・劉歆和《漢書》之關係」(『史漢研究』上海古籍出版社、二〇一四年)もある。

- (22) 班彪「後傳」と班固「漢書」の間に大きな亀裂があることは、小冷賢一「班氏父子の歴史観と漢末儒教の神秘化―特に其の王朝賛美の態度をめぐって」(『小冷賢一君記念論集』東京大学文学部中国語学中国文学研究室、一九九三年)が指摘している。

- (23) (班固以爲、唐・虞・三代、詩・書所及、世有典籍、故雖堯・舜之盛、必有典・謨之篇)然後揚名於後世、冠德於百王。故曰、巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章也。漢紹堯運、以建帝業、至於六世、史臣乃追述功德、私作本紀、編於百王之末、廁於秦・項之列、太初以後、闕而不錄。故探簞前記、綴輯所聞、以述漢書。起于高祖、終于孝平・王莽之誅、十有二世、二百三十年。綜其行事、旁貫五經、上下洽通、爲春秋考紀・表・志・傳凡百篇(『漢書』卷一百 敘傳下)。

- (24) 『漢書』藝文志が、今文派に對抗して古文を尊重し、諸子の思想を振り返りつつ儒教による統一化をはかる劉歆の思想を端的に表現することは、金谷治「漢書」藝文志の意味―体系的な哲学的著述として(『文化』二〇一六、一九五六年)を参照。このほか、傅榮賢『漢書・藝文志』研究源流考(『黃山書社、二〇〇七年)、李零『蘭台万卷―讀《漢書》・藝文

志」(生活・読書・新知三聯書店、二〇一一年)、尹海江『漢書・藝文志』輯論(西南交通大学出版社、二〇一三年)など多くの研究がある。

(25) 易曰、河出圖、雒出書、聖人則之。故書之所起遠矣。至孔子纂焉、上斷於堯、下訖于秦、凡百篇。而爲之序、言其作意(漢書 卷三十 藝文志)。

(26) もちろん、孔子が『尚書』のすべてを編纂したという班固の見解は、今日では否定されている。たとえば、津田左右吉『儒教成立史の側面』(『儒教の研究』一、岩波書店、一九五〇年、『津田左右吉全集』十六、岩波書店、一九六五年に所収)は、三代の湯・武革命を中心とする物語は、戦国初期または戦国に近いころ、堯・舜の禪讓説話はさらにその後に成立したもの、としている。

(27) 若夫上稽乾則、降承龍翼、而炳諸典・謨、以冠德卓絕者、莫崇乎陶唐。陶唐舍胤、而禪有虞、有虞亦命夏后、稷・契熙載、越成湯・武。股肱既周、天廼歸功。元首、將授漢劉(『文選』卷四十八 符命 典引 班孟堅)。なお、『典引』全体の解釈については、注(三)所掲渡邊論文を参照。

(28) 蓋以膺^①當天之正統、受^②克讓之歸運、蓄^③炎上之烈精、蘊^④孔佐之弘陳云爾。洋洋乎若德、帝者之上儀。諸^⑤誓所不及已(『文選』卷四十八 符命 典引 班孟堅)。

(29) 贊曰、自古書契之作而有史官、其載籍博矣。至孔氏纂之、上繼唐堯、下訖秦繆。唐虞以前、雖有遺文、其語不經。故言黃帝・顓頊之事、未可明也。／及孔子因魯史記而作春秋、而左丘明論輯其本事以爲之傳、又纂異同爲國語。又有世本、錄黃帝以來、至春秋時帝王・公侯・卿大夫祖世所出。春秋之後、七國並爭、秦兼諸侯、有戰國策。漢興伐秦定天下、有楚漢春秋。故司馬遷據左氏・國語、采世本・戰國策、述楚漢春秋、接其後事、訖于天漢。其言秦漢詳矣。至於采經摭傳、分散數家之事、甚多疏略、或有抵牾。亦其涉獵者廣博、貫穿經傳、馳騁古今、上下數千載間、斯以勤矣。又其是非頗繆於聖人、論大道則先黃老而後六經、序遊俠則退處士而進姦雄、述貨殖則崇勢利而羞賤貧、此其所蔽也。然自劉向・揚雄博極羣書、皆稱遷有良史之才、服其善序事理、辨而不華、質而不俚、其文直、其事核、不虛

美、不隱善、／故謂之實錄。嗚呼、以遷之博物洽聞、而不能以知自全、既陷極刑、幽而發憤。書亦信矣。迹其所以自傷悼、小雅巷伯之倫。夫唯大雅、既明且哲、能保其身。難矣哉(『漢書』卷六十二 司馬遷傳)。

(30) 嘉瀬達男「諸子としての『史記』——『漢書』成立までの『史記』評価と撰述状況の検討」(『立命館史学』五九〇、二〇〇五年)は、『史記』が史書としては読まれておらず、当時の受容状況から見て、諸子あるいは雑家とすることも可能であったという。それにも拘らず、六藝略春秋類に著録された理由については、戸川芳郎「芸文志——偶談の余(3)」(『漢文教』二一〇八、一九七三年)も参照。

(31) 王莽傳の内容については、沈重・李孔懷「論『漢書・王莽傳』」(『中国史研究』一九八六・三、一九八六年)がある。

(32) 『尚書』秦誓篇については、池田末利「秦誓解」(『大東文化大学漢学会誌』一四、一九七五年)、板野長八「秦誓の作成」(『史学研究』一五四、一九八二年)を参照。

(33) 屈万里『尚書集解』屈万里先生全集二(聯經出版公司、一九八三年)。これに対して、孫星衍『尚書今古文注疏 十三經清人注疏』(中華書局、一九八六年)は、『史記』秦本紀に基づき、晉人を破って般の役に報いた時に軍に誓ったものとする。

(34) 班固が編纂した『白虎通』卷二 號にも、『尚書』曰、邦之榮懷、亦尚一人之慶。知秦穆之霸也」と、『尚書』秦誓篇のこの部分が引用されている。

(35) 贊曰、王莽始起外戚、折節力行、以要名譽、宗族稱孝、師友歸仁。及其居位輔政、成・哀之際、勤勞國家、直道而行、動見稱述。豈所謂、在家必聞、在國必聞、色取仁而行違者邪(『漢書』卷六十九下 王莽傳下)。

(36) 子張に「聞」を問われた孔子は、質直で義を好み、言を察して色を觀、慮りて以て人に下る「達」と比較して、「聞」を批判している(『論語』顏淵第十三)。

(37) 莽既不仁而有佞邪之材、又乘四父歷世之權、遭漢中微、國統三絕、而太后壽考爲之宗主、故得肆其姦惡、以成篡盜之禍。推是言之、亦天時、非人

力之致矣（『漢書』卷六十九下 王莽傳下）。

- (38) 及其竊位南面、處非所據、顛覆之勢險於桀紂。而莽晏然自以、黃・虞復出也。乃始恣睢、奮其威詐、滔天虐民、窮凶極惡、毒流諸夏、亂延蠻貉、猶未足逞其欲焉。是以四海之內、囂然喪其樂生之心、中外憤怨、遠近俱發、城池不守、支體分裂、遂令天下城邑爲虛、邱墟發掘、害偏生民、辜及朽骨（『漢書』卷六十九下 王莽傳下）。

- (39) 自書傳所載亂臣・賊子・無道之人、考其禍敗、未有如莽之甚者也。昔秦燔詩書以立私議、莽誦六藝以文姦言。同歸殊塗、俱用滅亡、皆坑龍絕氣、非命之運。紫色・繩聲、餘分閭位、聖王之驅除云爾（『漢書』卷六十九下 王莽傳下）。

- (40) 内田智雄「漢書刑法志雜記」（『同志社法学』一〇一二、一九五八年）は、『漢書』刑法志の引用の中に、『尙書』と『論語』の多いことを指摘している。なお、『漢書』の志・表については、戸川芳郎「漢書の志・表——偶談の余（6）」（『漢文教室』一一二、一九七五年）、陳其泰「対『漢書』十志的総体考察」（『漢中師院学報』一九九三・四、一九九三年）、内山直樹「『史記』『漢書』の『書』『志』について——名称をめぐる瑣考」（『中国文化』六二、二〇〇四年）がある。

- (41) 『漢書』五行志と『尙書』洪範、そして劉向の『洪範五行傳論』との関係については、平澤歩「『漢書』五行志と劉向『洪範五行伝論』」（『中国哲学研究』二五、二〇一一年）を参照。

- (42) 『漢書』地理志の意義、および『尙書』禹貢との関係については、張孟倫『《漢書・地理志》在中国史学史上的価値』（『蘭州大学学报』一九八三・二、一九八三年）、史念海「班固对历史地理学的創建性貢獻」（『中国歴史地理論叢』一九八九・三、一九八九年）を参照。

- (43) 『史通』内篇卷一 六家篇は、史書を六家（尙書家・春秋家・左傳家・國語家・史記家・漢書家）に分類しているが、左傳家（編年體）と漢書家（紀傳體斷代史）の二つの体裁を理想としている。